

第三章 文明の本旨を論ず

A . 大意

1.文明の本旨

文明とはそも「何物たる」や？西洋文明の由来を論ずる前に、ここで、その本旨（本質）を論じておくことにしよう。まず、文明には「狭義の文明」と「広義の文明」とがあることに注意しよう。「その狭き字義に従えば、人力をもって徒に人間の需要を増し、衣食の虚飾を多くするの意に解すべし」（安樂を目指す、経済を中心とした物質文明）。「その広き字義に従えば衣食住の安樂のみならず、智を研き徳を修めて人間高尚の地位に昇るの意に解すべし」（品位の完成を目指す、精神文明）。「元來人類は相交わるを以ってその性とす」（人間には本来「社交性の原理」が備わっている）。それゆえ、文明(civilization)というのは人間交際のなかで進歩・発展していくものであり、家族→部族→「シウイタス(civitas)」という形で、「人間交際の次第に改まりて良き方に赴く有り様を形容したる語」をいうのである。今ここで、人間交際→「シウイタス（群れ→国）」の四類型を示そう。第一類型、衣食住の安樂のみありて、智徳発生の自由が押さえつけられている、例えば、松前藩統治下の蝦夷人民の有り様。第二類型、智徳の道は塞がれておらず、宗教や道徳論も進歩しているが、神政府のために束縛を蒙り、自由の大義が全く行われていない、亜細亜諸国の人民の有り様。第三類型、個人一人一人は自由自在に生きているが、同権の趣意なく、大は小を制し、強は弱を押し、暴力のみが支配している、一昔前の西洋諸国人民の有り様。第四類型、各人自由自在に生き、しかも、「権義（権理通義）異にすることなし」といえども、未だ人間交際の味を知らない野蛮人種の有り様。以上の四類型には「文明と称すべきものなし」。然らば則ち何事を指して文明となずくるや。「文明とは人の身を安樂にして心を高尚にするを言うなり、衣食を饒にして人品を貴くするを言うなり」。「文明とは人の安樂と品位との進歩を言うなり。又この人の安樂と品位とを得せしむるものは人の智徳なるが故に、文明とは結局、人の智徳の進歩と書いて可なり」。このように、文明というものは至大至重にして人間万事を包羅するものなのである。「政治」というものが独り文明の源をなすのではなく、それは「文学（学問） 商売（経済）等」とともに、その一翼を担うにすぎないということを知らなければならないのである。

2. 二つの誤謬

ここで文明についての二つの誤謬について論じておこう。その第一は、現状の西洋文明諸国の人々を見ると、不徳の所業多く、偽詐をもって商売を行っている者が多い、これでは到底文明とは言えない、という誤謬である。この誤謬は「十全健康」をもって文明と見ることに基づいている。しかし「十全健康」のもとにある文明は望むべくもなく、文明というものは常に「帶患健康」のもとにあると知らなければならない。第二は、文明の本旨は上下同権にあるのだから、文明国である以上、「君主」を奉ずるようなことがあってはならない、という誤謬である。これが誤謬であることは、メキシコの共和政が英国立君の政に遠く及ばないという一事を見れば一目瞭然であろう。しかし、「立君の政治」と「合衆の政治」に関するこの誤謬については、以下、徹底的に掘り下げて論ずることにしたい。

3. 「立君の政治」と「合衆の（共和）政治」

イ. 支那日本等の「立君政治」への感潮

支那日本等に於いては「君臣の倫を以て人の天性と称し、君臣の分は人の生前に先ず定まりたるように思い込む」ことに感潮している。それゆえ、そこでは「国を立てるには君臣の外に手段なし」と「立君の政治」を自然必然として受け入れてきた。しかし、これは明らかに誤りである。何故なら、「君臣は人の生まれて後に出来たもの」であるからである。「君臣の分を人の性と言う事は出来ない」からである。「物ありて然る後に倫あるなり、倫在りて然る後に物を生ずるに非らず。憶断を以て先ず物の倫を説き、その倫に由りて物理を害する勿れ。」「立君の政治」は自然必然のものではなく、偶然に出現した「約束」にすぎないのだ。それゆえ、それはいつでも変えてよいのだが、「唯之を更むると否とに就ての要訣は、その文明に便利なると不便利なるとを察するにあるのみ」。

ロ. 「合衆の（共和）政治」も人間交際の至善ではない。

以上で論じたように、「立君の政治は之を変革しても可なり」。それではこれを変革して「合衆政治」をとれば「至善の止まる所」に至るかといえそうではない。「ピリグリム・フハアザス」に始まるアメリカの建国・独立は、至公至平の天理に基づき、人類の権義を保護し、天与の福祉を全うする事を目指したものであったが、今日に至りて事実をみれば、「人民合衆して暴を行っている」。多数決原理に基づいて「国民四分の一の心を以て他の四分の三を制している」。そこでは男といえ一生涯をかけて「金円」を追い求め、ご婦人たちは「終身孜々としてこの逐円の男児を生殖するのみ」。「これを人間交際の至善と言わんか」。「合衆の政治」にも色々問題があるのである。

3. 良い政府とはどのようなものをいうのか。

それゆえ、「文明の国には君主を奉ずべからず」というがごときは「所謂片目を以て天下のことを窺う論なり」。両眼を開けてよくみれば、「立君の政治必ずしも良ならず、合衆の政治必ずしも便ならず」なのだ。そのことは以上で論じてきたことから理解出来よう。我々は政府なるものが「唯便利のために設けられたものである」ということを見落としてはならない。そして「人間の目的は唯文明に達するの一事にある」ということを忘れてはならない。人間が唯一目的とする文明に達するためには様々な方便（手段）があつてしかるべきなのだ。それゆえ、複眼的に見れば、「立君の政治」であろうと「合衆の政治」であろうと、「唯その文明に益すること多きもの」こそ「良き政府」と呼ばなければならないのである。

4. 結論

結論を言おう。文明の極度に至たらば何らの政府も全く無用の長物になるであろうけれども、「世に未だ至文至明の国あらざれば、至善至美の政治も亦未だあるべからず」。今の世の文明はその進歩の途中にあり、政治も亦進歩の途中にあるのだから「政治の良否を評するには、その国民の達し得たる文明の度を測量してこれを決定すべし」。

B. キーワードのコメント

1. 「元来人類は相交わるを以てその性とす」。

ディドロらフランス啓蒙主義思想家たちは、人間には生得的に「社交性原理」が備わっていると考えた。それを受けてアダム・スミスは人間には本来「交換性向」が備わっていると考へて彼の経済学を展開している。福澤はそれらの思想を継承している。

2. 「シウイタス(civitas)」

英語でコモン・ウェルス(common・wealth)、ラテン語でキウイタス。人間交際(群れ・家族部族)→契約→国民集合体(国)になった状態をいう。それは未開社会から文明社会に移行したことを意味する。

3. 「文明とは結局、人類の智徳の進歩と云いて可なり」。

智徳の進歩→人の安楽と品位との進歩。これが福澤の基本認識である。ここから、福澤は文明の本旨(本質)を「智徳の進歩」に求めていたことが知れる。

4. 「君臣の倫を以て人の天性と称し、君臣の分は人の生前に先ず定まりたるもののように思い込む」。

徳川門閥制度を支えた儒教(特に朱子学)の思想。それは、天と地のとは分かたれており、天が上で地が下であるのは自然の理であると先ず論ずる。ついで、人間社会においても上下の分があるのは自然界に天と地の分があるのと同様自然の理であると説く。そしてそれはさらに、「上下の分」という自然界を貫く自然の理は人間の心にまで貫徹し、人間の心はその本性として(生得的に)「君臣の倫」を持っていると説く。それゆへ、その思想に従えば、「上下の分」→「立君の政治」は自然の理にかなう自然的必然なのである。福澤が生涯をかけて戦ったのは門閥制度を支えたこの思想である。福澤の儒教思想批判のポイントは、君臣という人間関係は人が生まれて後に出来上がったものであり、したがって、「君臣の倫」なるものは人が生まれた後に造られたものにすぎないというところにある。「その条理は偶ま世に君臣なるもの有りて然る後にできたるものなれば、この条理を見て君臣を人の性というべからず」。

5. 「文明の極度に至たらば何らの政府も全く無用の長物に属すべし」。

繰り返して出てくる福澤の「文明的完成状態」のイメージ。そこでは、智徳の発展に基づく人格的品位の完成と無政府状態がイメージされている。